

Title	ジェンダー的視点から見た神社における人生儀礼の維持と変容： 「安産祈願」と「初宮詣」を事例に
Sub Title	The maintenance and modification of life rituals at shrines from a gender perspective : a case study of anzankigan and hatsumiyamoude
Author	牧田, 小有玲(Makita, Koure)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2025
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.30 (2025. 7) ,p.42- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：儀礼空間が創る宗教、実践が創る儀礼空間： テクノロジー・身体性・規範に注目して
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20250701-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジェンダー的視点から見た神社における人生儀礼の維持と変容 ——「安産祈願」と「初宮詣」を事例に——

The Maintenance and Modification of Life Rituals at Shrines from a Gender Perspective:
A Case Study of *Anzankigan* and *Hatsumiyamoude*

牧田 小有玲

1. はじめに

日本の神道において最も重要視される儀礼は、「祭祀」である。神道はその発生過程において、自然への畏怖や作物の豊作を願う儀礼が中心に位置しており、神道の三分野、神社神道、皇室神道、民俗神道のそのいずれにおいても、祭祀が重要視されている。現代においても社殿などの建築物よりもむしろ、皇室や各神社などで行われる儀礼である「祭祀」が神道および神社の核であると論じる学者は多い。古くより神社祭祀においては、地域の農作物の豊作や地域の平穏を祈るなど、公共性の高い願意が込められた儀礼が行われてきたが、これらは利益や加護を求めて行う儀礼として、「祈祷」とも呼ばれる。平安中期以降は、公共性の低い、個人のための祈祷が陰陽祓の活動によって始められたとされ、中世以降の吉田神道においても、密教の影響を受けて火を用いた護摩など、さまざまな祈祷が行われてきた（國學院大学日本文化研究所編 1999）。現代においては、個人や家族、会社などで私的な祈祷、例えば厄祓や車祓（くるまばらい）、病氣平癒や商売繁盛などを求めて神社に参拝する人々を見ることは珍しくない。しかし、祭祀の本質はその公共性にあると論じられてきたがゆえに、民族学や神道学の既往研究では、個人の祈祷には十分に焦点が当てられてこなかった。

本稿で注目したいのは、妊娠・出産にかかわる人生儀礼である、「安産祈願」と「初宮詣」である。安産祈願は、文字通り安産を祈願するための祈祷で、地域により違いはあるが、多くは妊娠5ヶ月を過ぎた頃に寺社へ赴き、出産の安産を祈願し、腹帯を授かる儀礼とされている。かつては各地の産神¹⁾（安産に靈験のある場所、あるいは地域の氏神神社）へ祈願し、妊婦の実家から腹帯を授かる儀礼が主流であった。明治・大正期には安産祈願の為社寺へ参拝し、その後帯祝いと称して親戚や産婆などを呼んで饗応するようになった。現代は、腹帯は神社で授与されるか、または自分で用意したものを神社で祓ってもらう儀式が一般的だとされている（田口 2013）。

一方、「初宮詣」は、「お宮参り」とも呼ばれる儀礼で、これも地域により違いはあるが、多くは誕生後約1ヶ月後に初めて神社に参る行事を指す。地域によっては古くはヒアケ、ユミアケ、ウブアケ、トリイマイリ、ウジミセなどとも呼ばれ、新生児の物忌が明け、神前に出ることができるとされていた（國學院大学日本文化研究所編 1999：302）。子の忌みは33日、母の忌みは75日とされる地域が多く、子の忌みが明けてもまだ母の忌みは明けていないため、母親は鳥居をくぐらず、祖母（父方の祖母）などが子を抱いて、母親以外の親族とともに参拝する風習があったが、近年ではほとんどの場合形骸化しており、出産から1ヶ月を過ぎれば誰でも神社へ参拝してよいと説明されることが多い。

安産祈願や初宮詣に限らず、人生儀礼は地域の共同体および家の構成員としての承認や再確認を行う役割を持つ。したがって、本来であれば、両者ともに自身の住む地域の氏神神社を訪れるというのが一般的であったが、近年では氏神地域という意識が希薄化し、祈願者が個人的に望む神社で行うケースが主流となりつつある。特に安産祈願は、育児雑誌やインターネットを通じて女性たちの間で情報が共有され（田口 2013：52）、女性らによる主体的な選択によって安産にまつわる有名神社で祈願を行う事例が増加している。

子が生まれるということは、社会集団の繁栄を意味する。妊娠と出産は、少なくとも日本では長らく女性に求められてきた役割の一つであった。それは、日本のイエ制度においては、出産以降にも女性のライフスタイルを定める規範で、家父長を中心とした家族の中で、妻や娘が子を産み、正しく育てるべきだと考えられてきた。当然近年においては、子を産まないという女性の選択は珍しいことではなく、さらに彼女らの選択を尊重すべきだとする一般的な理解は浸透しているが、それでもなお、日本の根強い家父長制的な観念においては女性に対する出産への重圧は未だ大きい。したがって、社会集団及び家族の繁栄を祈り願う、妊娠や出産にかかわる祈祷は、ジェンダー非対称的な家父長制と不可分な関係を持っている。一方で、女性が家長に連れられて社寺へ赴き、祈願を受けさせられる、受動的な存在であるという解釈では、初宮詣や安産祈願などの儀礼行為が女性を家父長制に取り込む装置であるという極めて一面的な理解で収束してしまう。安産祈願をはじめとして、女性らが神社を選び、祈祷を受けるという近年の事象に鑑みれば、必ずしもそれらの儀礼が家父長制を再生産するだけの装置とは限らないと考えるのが妥当だろう。当然、女性による宗教的儀礼への参画を、家父長制の再生産だけに帰着させず論じることが可能である。女性によるスピリチュアル実践について調査した小松は、組織的・男性的な宗教の内部で自身の立場を構築しづらい女性たちが、スピリチュアリティとのかかわりを通じて人生・自己への積極的な意味付けを行う過程を説明した（小松 2012）。小松の研究からわかるのは、組織的・男性的な神道や習俗の伝統的なやり方とは距離を置きながらも、霊的な存在を求めて関わろうとする女性を焦点化する必要性である。宗教的儀礼に女性自身が積極的な意味付けを行い、参加しているとすれば、それは儀礼、あるいは儀礼空間をいかに再構築しているのだろうか。

本稿では、初宮詣や安産祈願といった妊娠や出産にかかわる祈祷は、女性のジェンダー規範の維持・変容を通してどのように再編成されているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 儀礼が担う、再生産と創発

儀礼論を確立させたヴィクター・ターナーは、ファン・ヘネップの通過儀礼論を深化させる形で、分離期・移行期・統合期の儀礼の過程を論じた。つまり、人々は分離期において自身の社会集団におけるアイデンティティから離れ、移行期においては曖昧な状態となり、統合期には再度元のアイデンティティに戻るという図式である（ターナー 2020）。これ以降、儀礼を論じる多くの研究が、儀礼の社会統合機能の役割とそれによってもたらされる既存の社会構造の再生産を強調してきた。一方で、ガーナ南部の精霊憑依や呪術、妖術について研究した石井美保は、オースティンの行為遂行性の議論を継承する形で「ある状況の下で、特定の慣習や約束事（規約）に従って言葉を発したり行為したりすることによって／において、ある出来事が成し遂げられる」儀礼のあり方を論じ、こうした分析は

1960年代後半以降で盛んになったと紹介している(石井 2010: 164-165)。そのように儀礼を捉えた場合、そこには常に不確実性や偶然性がつきまとい、それをきっかけとした「新たな「現実」の可能性」をひらく創発的な行為をも儀礼には含まれると論じている(同上: 165-166)。オースティンの行為遂行性を発展させたバトラーは、ジェンダーについて「ひそかに時をつうじて構築され、様式的な反復行為によって外的空間に設定されるアイデンティティ」と説明し、その規範は強固になるだけでなく反復行為によって攪乱可能であると指摘した(バトラー 2018: 247)。つまり、儀礼には社会統合の再生産の機能だけでなく、それを揺るがし、不安定にさせる機能をももたらす可能性がある。本稿では、初宮詣や安産祈願といった妊娠や出産にかかわる祈禱を行為遂行的な実践と捉え、それらの儀礼が女性のジェンダー規範にどのようにかわり、儀礼そのものを再編成しようのかという視座を主に論じたい。

3. フィールド概要

筆者は2022年12月より、およそ280日間にわたって九州北部にあるX町のA神社でフィールドワークを行った。X町は、明治から昭和半ばにかけて石炭産業の隆盛により炭鉱開発が行われ、人口も右肩上がりであったが、エネルギー革命の影響を受けると炭鉱は閉山となり、大幅な人口流出が起こって現在では過疎地域となった。A神社は、X町一部地域の氏神を祀る神社で、旧社格²⁾は郷社、氏子は3千戸ほどで、地方における一般的な小規模神社である。主祭神は、神功皇后(じんぐうこうごう)を中心とした八幡三神で、その他にも、明治時代以降に合祀された祭神も併せて十数柱が祀られている。八幡信仰においては、神功皇后の息子である応神天皇を主祭神に、比売神(ひめのかみ)と神功皇后の三神がともに祀られることが多い。神功皇后については九州北部に多くの伝説が残っており、同祭神を祀る神社が複数点在している(吉田 2014)。それらは、応神天皇を妊娠中に行った三韓征伐、その後の出産などにまつわる伝承によるものである。

この神社に駐在するのは、並木葵(仮名)宮司と、その家族や臨時の職員などである。葵以外に資格を持った神職³⁾は常駐しておらず、神社の事務などを手伝う葵の家族も資格は持っていない。臨時の職員はアルバイトやパートタイムとして、近所に住む主婦や、職を探す若者が非正規雇用で働いており、授与所対応や境内清掃などを行っている。女性宮司である葵は、代々母方の家系で継いできたA神社の宮司職に幼いころから魅力を感じ、神職資格を得られる大学へ通い、他神社での奉仕を経てA神社を継ぐことになった。女性が神職として登用が認められたのは1946年のことで、それ以降女性神職の数は右肩上がりが増加しており、2020年現在、約17%を女性が占めている。一方で、女性は地域の小規模神社において、宮司の妻や娘として男性とともに奉仕するケースが一般的で(越智 2017)、A神社のように女性が宮司として奉仕する神社は珍しいといえる。さらに、葵の父親を除いて、日常的に神社の運営にかかわるメンバーの多くは女性で構成されているのも、他の神社では多くはない。

簡単に、筆者のポジショナリティにおいても説明をしておきたい。筆者は、神社を家業とする家に生まれたことから、大学卒業後に神職資格を取得している。A神社では、神職として手伝いをしながら住み込みで調査を行った。そのため、多くの場面において「神職らしい」振る舞いが必要とされることもあり、かなり能動的に神社に関わってきた。たとえば、毎朝行う日供祭(神様に米・酒・塩・

水などをお供えし、毎日の平穩を祈る儀式）や月次祭、初宮詣や安産祈願をはじめとする個人の祈祷、例大祭などに神職として参加したほか、授与所で御朱印を書いたり、電話・メール対応をしたりなど神社運営の主要構成員として参加させていただいている。A神社では、「女性らしさ」を戦略的に見出だしていく様が垣間見れるが、その過程では、調査者であるのみならず、神職であり、また女性でもある筆者が、積極的に参画している場面があるということを付記しておきたい。

4. 事例紹介

A神社の主祭神である神功皇后は、前述の通り九州北部にその伝説が多く残っている夫である仲哀天皇の死後、応神天皇の懐妊中に新羅へ遠征し、征服したと言われている。臨月での出陣中、鎮懐石を腰に挟んで出産を遅らせ、その後無事に出産したという逸話から、全国では子宝・安産の神様として崇拝されている。A神社は、かつてこの地域にいた熊襲（くまそ、蛮族のこと）を、神功皇后が平定し、その時に彼女が使用していた剣が納められ、人々に崇拝されるようになったのが起源だと神社の由緒に記されている。A神社では、神功皇后を「応神天皇を立派に育てた、戦う強い女性」のモデルであると解釈し、「女性」「母」「安産」といったキーワードの御利益を戦略的に打ち立てている。さらに、A神社についてはプライバシー保護の為詳細は省くが、神社が位置するのはそれらのキーワードに親和性の高い名前のついた土地であり、神社および土地の名前に惹かれて遠方から訪れる参拝客も少なくない。

A神社では、若者向けに工夫を凝らしたお守りや御朱印、おみくじなどの頒布品を数多く用意しており、SNS（主にInstagram）の運用にも力を入れている。神功皇后を主祭神とすることにちなみ、安産祈願にも重点を置いている。そうした戦略により、小規模な地方神社でありながらも、参拝や祈祷のためにA神社に訪れる人々は氏子地域外からであることも多い。祈祷は、希望が入った場合に一件ずつ受けており、年始に氏子地域の個人の厄祓いや会社の新年祈願を除けば、祈願内容は安産祈願、初宮が多く、その次に車祓いや七五三や家内安全などがある。A神社の安産祈願や初宮の祈祷では、他の願意の祈祷と比較し、氏子地域およびX町以外からの参拝者の割合が多くを占めている。プライバシー保護のため各々の具体的な件数は割愛するが、その割合は以下の通りである。

表1 2023年～2024年におけるA神社での願意別祈祷希望者居住地の割合

	安産祈願	初宮詣	厄 祓	車 祓
A神社氏子地域	3.2%	11.7%	31.5%	65.4%
氏子地域外X町内	16.1%	11.7%	22.1%	15.3%
その他	80.6%	76.4%	46.3%	19.2%

安産祈願と初宮詣以外では、A神社で最も希望件数の多い厄祓と、比較的件数の多い車祓を比較対象として挙げた。この表から分かるように、A神社では安産祈願と初宮詣に訪れる人々のほとんどが、A神社氏子地域およびX町の外部から、つまり遠方から訪れている。安産祈願においてはその傾向はより顕著である。

祈祷では、具体的に何が行われているのか。以下では、A神社における祈祷の次第を簡単に紹介したい。

参拝者来社
控室にて受付用紙、絵馬の記入
号鼓、参拝者社殿に入場
修祓
斎主一拝
祝詞奏上
玉串奉納（初宮：乳児の父親、安産祈願：妊婦本人）
鈴祓いの儀
斎主一拝
社頭講話（授与品の説明含む）

以上は、神社本庁が定める「神社祭祀規程」の「小祭」のやり方に基本は則りながらも、所々で改変がなされている。それぞれの次第を簡単に説明する。参拝者が来社すると、社殿の前で二礼二拍手一礼の作法で参拝するように声をかけ、その後、控室で受付を行う。受付では、用紙に名前や住所、生年月日、願意などを書いてもらい、絵馬も記入してもらう。その後、祈祷を受ける人が上がる拝殿で待機する神職が祭りの始まりの合図である太鼓を鳴らし、その間に参拝者は拝殿へ入場する。祭りの前に清めの儀式である修祓を行い、祓詞の読み上げや大幣を振ることによって、お供え物や、神前に捧げる玉串（榊）、参拝者を清める。その後、斎主を代表として神前に一拝を行い祭りが始まる。この時、神への捧げものである神饌を供える儀式・献饌が入ることもあるが、A神社では省略されている。次に、斎主が祈祷の願いを述べる祝詞奏上が行われ、その後に、参拝者自身が神へ願意を届けるための玉串拝礼が行われる。ここで玉串を奉納するのは、初宮詣であれば、乳児の父親で、安産祈願では妊婦本人となる。その後、斎主は参拝者の近くで鈴を振り、心身を清める儀式を行い、始まりと同様に一拝をもって祈祷は終了となる。その後は、斎主が講話を行いながら、授与品・頒布品の説明を行い、参拝者は拝殿から退場する。授与品・頒布品は、納められた初穂料や願意によっても変わるが、初宮の祈祷後には、神札、絵馬、清め塩、子ども手帳が、安産祈願の場合にはお守り、神札、絵馬、清め塩、腹帯が授与される。両者とも、祈祷の終了後には社殿前で記念撮影を案内する。初宮詣で授ける子ども手帳は、初宮詣をはじめとする子どもの人生儀礼を記録するもので、初宮詣の際には乳児の足形を記録したり、お食い初めや七五三などの写真を収めたりして成長の過程を記録できるものである。子ども手帳はすべての神社で用意されるものではなく、A神社が独自で発注し、初宮詣の参拝者に配布しているものである。さらにA神社では、安産祈願の専用の絵馬を用意しており、祈祷を受ける人々は、「無事に出産できるように」「健康に育ってほしい」などといった願いごとを記入する。以上のことから分かるのは、安産祈願や初宮詣は、特定の地域における、家族の構成員の祝福や家の繁栄を祈る儀礼という側面を持つとともに、それよりもむしろ個々の家族の両親と子供のライフイベントとしての意味合いが大きい。

上記に記した祈祷の次第の中では、祈願の内容を神に伝える祝詞奏上が核となる部分であるが、ここではA神社での安産祈願の祝詞を紹介する。

安産祈願祝詞（発表者による抜粋と意識、一部改変）

この森に静まりますA神社の大神様の大前に、斎主〇〇が恐れ謹んで申し上げます。大神様が鎮座されている、〇町〇番地に住む〇〇（父親）の妻は天地の恵みを受けて先日懐妊しました。大神様の恩恵をいただいて健康で輝く玉のような赤子を授けてくださいますようお願いしている間に、月日が経って臨月を待つほどになり、そこで今日という佳き日に、大前に参上してお礼の品々を献じさせていただき、お願いしています。その姿を見ていただき、大神様の広く深い御神徳のそばで結ぶ岩田帯（腹帯）によって赤子を育てていただき、海の潮が満ちる時には赤子が安全に穏やかに生まれ、産声を高らかに上げ、若竹がすすくと育つように素直に正しく成長しますよう、また〇〇（母親）をはじめ〇〇家に至るまでともにお守りいただきますよう、恐れ謹んで申し上げます。

祝詞の基本構造は、神の威厳を讃え、出来事（ここでは懐妊）を報告して感謝の意を述べ、最後に願いを述べるという作りになっている。A神社の安産祈願の祝詞も同じように、まず子を授かったことについての報告と感謝を述べ、無事に出産できるよう、願いを伝える。ここで確認しておきたいのは、安産祈願には夫婦が共に参列する前提で、家長である夫の妻が懐妊したという報告の仕方である。夫が家族の代表者であり、その妻が妊娠したことについてを報告し、祈念する。祝詞は、基本的なルールに則った上で、祝詞例文集や、先代の祝詞を参考にしながら神職がオリジナルで作成するものである。本来であれば、祭祀ごとに祝詞を作成し、書き直すのが望ましいとされているが、よほどのことがない限り、個人祈祷では同じ祝詞を奏上する。A神社の祝詞も、他社の神職の前例を参考にしながら、オリジナルで作成しているものだ。

祈祷では、基本的に神職が祭祀のプロセスを遂行するのが中心で、参拝者は参列し、時に神職の指示に従いながら、おじぎをしたり、玉串を上げて参拝をするという動きをする。神職は神と人との「仲執り持ち」だとされており、その儀礼空間を司っている。祭祀の方法は、神社本庁の定めるプロセスに則っているため、簡単に変更されることはないが、実際に行われる祈祷の細部の改変は、祭祀を司る神職の裁量で決まる。したがって、祝詞の内容を含め、儀礼の内容と形式は前例主義的に繰り返されることになるが、実際の運用はその場を司る神職に委ねられている。

以下では、祈祷を行う準備段階で行われた、参拝者と神社側のやりとりに関する一場面を紹介したい。

初宮詣の祈祷を希望するため、ある女性がかけてきた電話を、筆者が取った。祈祷の願意や希望の日時を伺い終わると、女性は申し訳なさそうに質問をしてきた。

「ちょっとお願いがあるんですけど、当日、義母が赤ちゃんを抱っこするのがルールだと思うんですけど、どうしても義母に抱っこさせたくなくて。首を支えてられていないから見てられないし、ご祈祷中も自分が抱っこしたいんです。本当は義母が抱っこするのがいいかもしれませんが、神主さんの方から「今はそうでない方（赤ちゃんのお母さんが抱っこする

方) もいますよ」の一言が欲しいです。]

筆者：「わかりました、ちょっと宮司に伝えておきますので、また何かあれば連絡させていただきます。」

その後電話を切り、筆者が電話の内容を葵に伝え、以下のように述べた。

「確かに義母に直接「私が抱っこしますよ」って言いたくないのはよく分かるなあ…自分が言うとか角が立つもんね。本当は義母が抱っこするのがルールだけど、当日はなんとなく（今はお母さんが抱いてもよいということを）言うようにしてみよう」

（2023年10月29日フィールドノートより（カッコ内は筆者が補足））

参拝者は祈祷が始まると、参列するのみで動きが制御されるため、祈祷に関する要望があればその前段階で伝える必要がある。上記の事例に限らず、祈祷の中でこのようなことも祈念してほしい、といったことや、祈祷を受けに来た経緯や意図を話してそれを祈祷に反映してもらうよう求める参拝者も少なくない。そのような相談を受けると、葵は祝詞を書き加えたり、削ったりという準備を行って祈祷に臨む。上記の事例では、実際に女性が訪れた際には、乳児は義母ではなく女性本人が抱えているため、実際に声をかける必要はなかったようである。

祈祷のやり方や理念は神職および神社の間で共有され、儀礼空間を保つためのあらゆる規範は維持されながらも、個別具体的な場面においては、神社における祈祷のオペレーションの都合や祈祷を受ける人々の事情によって変更がなされることがある。その際の対応は神職、とりわけ神社の長である宮司に委ねられている。

A神社では、上記の事例のように葵の裁量で個々の要望に応える場面が見受けられるが、いくつかのシーンでは葵に葛藤をもたらすこともある。以下は、初宮詣に来た参拝者について触れた葵の語りである。

この前初宮に来た家族で、（赤ちゃんの）お父さんが赤ちゃんを抱っこして着物^{4）}を掛けて社殿に入ってきたのね。お母さんは手ぶらで。その時はちょっとうーんって思ったよね。これに関しては男女平等とかの問題じゃないから…。よっぽどのことがない限り、お父さんが赤ちゃんを抱っこして神様の前に上がるのは、違うと思うかなあ、私はね。

（2025年2月27日フィールドノートより（カッコ内は筆者が補足））

乳児を抱くことについて相談してきた女性の事例では、葵は悩みながらも要望に応えたが、上記の事例では、男性が乳児を抱くことについて疑問を呈している。祈祷の次第やルールは、前述の通り神社本庁の定める「神社祭祀規程」の「小祭」に則っているが、乳児を誰が抱くかについてなどの、各々の個人祈祷に関する決まりは記されていない。義母が、あるいは女性が乳児を抱くべきであるといったルールは、習俗的なもので、地域によっても規範化の度合いは異なり、形骸化していることも多い。

5. 分析

これまで、A神社における安産祈願と初宮詣の内容と、その前後における出来事や宮司である葵の語りを紹介した。前述の通り、安産祈願や初宮詣は、子が生まれるということを社会集団の繁栄を象徴する出来事として祝う儀礼行為で、家長を代表として行うと同時に、女性に「妻」や「母」として出産や育児というケア役割が期待されるという点で、家父長制と不可分な関係性を持っている。しかし、安産祈願については育児雑誌やインターネットを通じて女性たちの間で情報が共有され、希望の神社で祈禱を行うなどといったように、女性自らの選択が反映されており、現在行われている安産祈願や初宮詣がア priori に家父長制の産物と捉えることは早急である。特に、現代のSNS普及によって、女性たちはより容易に、広く情報を集めることが可能となり、A神社においては初宮詣においても氏子区域外からの参拝者が一定数いることから、その傾向が見られる。安産祈願や初宮詣が、神道のルールや地域の慣習に依拠しながらも、「無事に出産できるように」「健康に育てほしい」などといった個人的な願意を伝え、叶えるための場所としても理解できる。その一方で、これらの祈禱は、人生儀礼として、社会集団内で規範化された行事でもあり、夫が代表者であることや、義母が乳児を抱えるなどといった古くからのルールは存続している。それらに関する細やかな変更は、神職に委ねられており、その時々によって大きな衝突が生まれないように修正される。石井は、儀礼には常に不確実性や偶然性がつきまとい、それをきっかけに「新たな「現実」の可能性」をひらくと論じたが（石井 2010：165-166）、まさにA神社では儀礼の形式は変わらずとも、人びとの小さな調整によって、儀礼中にとどまらず、その外でも有効なジェンダー規範を揺るがす可能性を持っている。

ここで注目したいのは、この修正は、一般的に普及するジェンダー平等の観念のみに照らし合わされたものではないということである。その修正の論理の一部は、葵の語りから垣間見える。乳児を抱くことについて相談してきた女性の事例では、葵は要望に応えようと試みたが、男性が乳児を抱くことについては疑問を呈した。彼女は乳児を義母に抱かせたくない女性の経験に同意し、規範と交渉することを試みたが、男性が抱くことについては「男女平等とかの問題」ではないとして、規範の交渉には踏み込まなかった。彼女の判断は、ジェンダー平等観念に基づきリベラルな価値観というよりむしろ、極めて個人的な経験や、神社や祈禱の空間にその振る舞いが馴染むかどうかという宗教的で曖昧な論理に力点が置かれている。神社の個人祈禱という儀礼空間、とりわけ妊娠や出産にかかわる人生儀礼の空間においては、ジェンダー規範は交渉されたり維持されたりすることによって常にせめぎ合っている。

6. おわりに

これまで、A神社における安産祈願と初宮詣の事例を通して、儀礼空間におけるジェンダー規範の維持・変容を通して再編成されていく様相を確認した。本稿では、安産祈願や初宮詣は家父長制と不可分な関係を持ちながらも、そのシステムに回収されるだけではない女性たちの試みに着目してきた。安産祈願や初宮詣に訪れるにあたって、従来正しいとされてきた、自らが居住する地域の氏神社への参拝ではなく、育児雑誌やSNSで情報を入手し、希望の神社で祈禱を受けるケースが増えているのは、女性による主体的な選択が反映されている結果だろう。儀礼の内外で「母」あるいは「妻」としてみなされる妊娠中および出産後の女性は、人生儀礼のバックグラウンドにある家父長制に身を

置きながらも、同時に、自らの希望に寄せるような形で、問題点を解決しようと試み、結果的に既存のジェンダー規範との微細な調整や交渉を行っているのである。一方で、長らく儀礼研究で当然視されてきたように、儀礼は既存の社会構造を再生産、さらには強化する役割を持っていることは否定できない。葵をはじめとして、関係者の女性らが「母」性を自らのものにする過程が見られたが、これらは本質的・固定的な男女二元論に依拠している部分が大きく、また、夫婦や家族が揃って儀礼を受けるという異性愛規範をも強化するものである。本稿で明らかにしたいのは、安産祈願や初宮詣などの儀礼の形式や内容はともに、常に繰り返され維持されると同時に、緩やかに、密やかに、女性の理想に手繰り寄せられ、家父長制的な規範とは異なる形の儀礼へと変容していく可能性を秘めているということである。そこに介入する人々の手によって、このような儀礼の再編成はなされるが、これらは必ずしも一方向的にリベラルなジェンダー平等の理念に近づくのではなく、その空間や宗教の秩序、論理に照らし合わされながら、維持と変容を重ねていくだろう。

【付記】

- 1) この論文は、2024年7月6日に慶応義塾大学三田キャンパスで開催された三田社会学会2024年度大会シンポジウム「儀礼空間が創る実践、実践が創る儀礼空間——テクノロジー・身体性・規範に着目して」にて発表した内容に加筆・修正を加えたものである。シンポジウムで拙論にご意見をくださり、議論を深めてくださったすべての先生方や先輩方、仲間に、そしてこのシンポジウムのオーガナイザーで、2024年度で同大学文学部をご退職された指導教授の三尾裕子先生に心より感謝を申し上げたい。
- 2) この論文は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2123の支援による成果の一部である。

【注】

- 1) 産神（うぶがみ）は、産土神（うぶすながみ）とも呼ばれ、産まれた土地の守護神とされる。時に同じ概念として捉えられるのが氏神（うじがみ）で、自身の居住する地域の鎮守の神のことを指す。さらに、氏神が鎮守する場所に居住し、氏神を崇敬する地縁関係を持った集団および構成員のことを氏子（うじこ）と呼ぶ（國學院大学日本文化研究所編 1999：355）。
- 2) 1871年に明治政府が公布した太政官布告「官社以下定額・神官職制等規則」によって近代社格制度が始まり、全国の神社は官社・諸社（民社）に分類・格付けされた。小規模な神社のほとんどは諸社（民社）に分類され、その中でも上から府社、県社、郷社、村社、無格社に分けられた（國學院大学日本文化研究所編、1999：121）。社格制度は戦後に廃止されたが、現在においても神社の規模や格を表すものとして、「旧社格」と併記され使われることが多い。
- 3) 神社神道において神職になるには、神社本庁の定める神職資格を必要とする。資格には階位があり、それぞれは資格取得までの時間的・経済的負担が異なる。大学では、東京の國學院大学や三重の皇學館大学などの神道系大学で高階位の資格が取得可能であるほか、全国の神社管轄機関である神社庁や両大学の講習会でも取ることができる。

- 4) 初宮詣では、乳児の誕生と約1ヶ月を生き延びたことを祝って、晴れ着を着用させる。最も広く知られているものは、初着（うぶぎ）や産着（うぶぎ）、祝着（のしめ）、祝い着などと呼ばれる子供用の着物で、初宮詣においては大人の肩から乳児の体を覆うように掛けるような形で着用するものである。

【文献】

- バトラー, J., 2018 (1990), 『ジェンダー・トラブル —フェミニズムとアイデンティティの攪乱 新装版』竹中 和子訳、青土社。（Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism of Subversion Identity*, Routledge.）
- 石井美保、2010、「6章 呪物をつくる、〈世界〉をつくる—呪術の行為遂行性と創発性」吉田匡興ほか編『シリーズ 来たるべき人類学③ 宗教の人類学』春風社、pp.159-179.
- 國學院大學日本文化研究所編、1999、『神道事典』弘文堂.
- 小松加代子、2011、「スピリチュアリティと女性—ジェンダーの視点から」『紀要 Bulletin』多摩大学グローバルスタディーズ学部.
- 越智三和、2015、「神職後継者問題における女性の役割についての一考察」『神社本庁総合研究所紀要』20号、45-79.
- 田口祐子、2013、「現代における人生儀礼の実態と意義—女性と子どもに関する儀礼を通じて—」[國學院大學文学研究科博士論文] 國學院大學.
- ターナー, V., 2020 (1969), 『儀礼の過程』富倉光雄訳、筑摩書房.（Victor W. Turner. *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure*）
- 吉田扶希子、2014、『脊振山信仰の源流—西日本地域を中心として—』中国書店.

（まきた こうれ 慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程）